

## 「キリストからの祝福」②悲しむ人に

マタイ 5:1-4

今日は「悲しみ」ということについて聖書から共に学びたいと思います。まず人の「感情」には、うれしい、楽しいといった肯定的な感情と、悲しい、怒り、寂しいなどの否定的な感情がありますが、基本となる感情は、喜び、怒り、悲しみ、不安の4つで、それらが混ざりあってその他のいろいろな感情をつくっていると考えられています。これら4つを「基本感情」とか「主感情」と呼びます。単純な見方ですが4つのうち肯定的なものは喜びであと3つは否定的な感情です。そんな割合からか、ある人はこんな風に言いました。「人生はくもり、どしゃ降り、ときどき晴れだから。」と。基本感情の「悲しみ」は大きな影響を私たちに与えます。ある程度年齢を重ねた人なら、「人生はつらく悲しいこといっぱいだ」と実感として感じるようになるのではないのでしょうか。悲しいという感情が私たちに教えてくれているのは、「何か大切なものを失ったよ」ということです。つらいことですが、私たちは人生を歩めば歩むほどに失うものも増えていきます。そういう意味で人生は喪失の連続。悲しみの連続です。悲しい時に、いわゆる心が痛い時にそれを十分悲しむことをグリーンワーク（悲嘆作業）と言います。多くの場合、涙を流すという行為がなされます。悲しい時に涙を流せることは良いことです。さらに一人で泣くのではなく誰かの前で心おきなく泣くことができればなお良いことです。悲しみと涙とは深い関連性があるのです。

今日のみことばに「悲しむ者は幸いです」とあるように主イエスは悲しみの中にある人と涙との深い関係について教えています。

それは、第一に、主イエスは、わたしたちのために、また、わたしたちと共に涙を流してくださるお方であることが示されています。ヨハネ 11:35に「イエスは涙を流された」とあります。これは聖書でいちばん短い節ですが、とても心強い言葉です。主イエスが親しくしていたラザロが死んで、その墓に向かうとき、主は、ラザロの姉妹マリヤが泣き、いっしょにいた人々も泣いているのをご覧になり、涙を流されました。

主は、すでに、「わたしはよみがえりです。いのちです。」11:25と言われ、今、ラザロを生き返らせるために墓に向かっています。涙などいらなはずです。しかし、ラザロがもうすぐ生き返ることを知っていても、主は、愛する者を失った人々の悲しみを、ご自分の悲しみとされたのです。

主がそのとき悲しまれたのは、どの人の人生の最後にも必ずやってくる「死」という現実でした。聖書に「罪から来る報酬は死です」ローマ 6:23とあるように、死は罪の結果です。もし、人に罪がなければ、人は死を知ることがなかったでしょう。人は神とともに、永遠を過ごすことができたでしょう。主が涙を流されたのは、ラザロとその姉妹のためだけでなく、罪のために死の恐怖に縛られている、人類すべてのためでもありました。

主がラザロを生き返らせたのは、ご自分の十字架がすぐそこに迫っている時でした。主は、涙を流されただけでなく、十字架の上で血を流し、人々を罪から贖い出してくださいました。ご自分の死によって死を滅ぼし、永遠の命を与えてくださいました。主は、人が罪のために死んでいくのを黙ってみておられるお方ではありません。人の罪を悲しみ、その解決のために、涙とともに血を流して下さったお方です。

マタイ 5:1に、「この群衆を見て、イエスは…」とあります。マタイ 9:36に「(イエスは) 群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかあいそうに思われた。」とありますから、山上の説教を語られたときも、主は深いあわれみをもって人々をご覧になったに違いありません。人の目には大丈夫そうに見えても、主イエスの目には「弱り果て、倒れかかっている」人たちのために、主はその人々たちを生かし、励まし、導く、命の言葉を語ってくださったのです。イエスは主であり、王であるお方、

最高の権威を持っておられるお方であるのに、常に、人々と同じ立場に立ち、人々とともに歩んでくださるのです。「悲しむ者は幸いです、その人たちは慰められるから」で使われている「慰める」という言葉には「傍にいる」という意味があります。主は、悲しむ者に、第三者的に「めそめそするな、頑張れ」と言われたのではなく、「幸いだ」「祝福されている」と言われました。主は人々の悲しみを共にし、悲しみの中にある人と共にいてくださるお方です。主が共にいてくださる以上の祝福はありません。

主イエスがわたしたちの流す涙の意味を理解し、慰めてくださるのは、第二に、主もまた、父なる神に涙をもって祈られたお方だからです。ヘブル5:7に「キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。」とあります。この言葉を読むと、主が十字架を前にして祈られた「ゲツセマネの祈り」を思い浮かべますが、主が「大きな叫び声と涙とをもって」祈られたのは、その時だけではなく、ご生涯を通してであったと思います。

詩篇39:12に「私の祈りを聞いてください。主よ。私の叫びを耳に入れてください。私の涙に、黙っていないでください。私はあなたとともにいる旅人で、私のすべての先祖たちのように、寄留の者なのです。」とあります。「涙の祈り」は、真実な信仰者たちに共通した体験でした。ハンナは神殿で泣いて祈り、その願いが聞き届けられました(サムエル第一1:10)。ヒゼキヤの涙も覚えられ、その病気がいやされました(列王記第二20:5)。パウロも人々のために涙をもって祈りました(使徒20:19, 31)。そうであるなら、主イエスがゲツセマネ以外でも、涙の祈りをささげられたことは確かなことです。

わたしたちはさまざまな時に涙を流しますが、主イエスがいちばん心に留めてくださるのは、祈りの中で流す涙だと思います。なかでも、自分が神のみこころを痛めていることに気づき、そのことを悲しんで祈る祈りを、主は、受けとめ、聞き入れてくださいます。コリント第二7:8-10は、このような悲しみについて、こう言っています。「あの手紙によってあなたがたを悲しませたけれども、私はそれを悔いていません。あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」ここには「この世の悲しみ」と「神のみこころに添った悲しみ」とが、「悔い」と「悔改め」とが対比されています。「悔改め」とは、たんに、「あんなことをしなければよかった」と過去を悔やみ、そのことを悲しむことではありません。自分を哀れに思い悲しむことからは何の良いものも生まれません。しかし、自分の罪を知って、それを悲しむことから、悔改めが生まれます。悔改めは、罪の赦しへと導き、そこから、新しい歩みが始まります。悔改めのない人生は後悔だけが残る人生ですが、悔改めのある人生は後悔のない人生となります。わたしたちは、真実な悔改めによって、悔いのない人生を送りたいと思います。礼拝は喜びの時ですが、悔い改めの結果として喜びがあっても悔い改め自体は悲しみの作業です。ですから礼拝においては神に喜ばれないことを悲しむ、「聖なる悲しみ」も伴うのです。そして、この主から、「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから」との言葉を聞きたいと思います。

さて、第三に、主イエスが、わたしたちの涙を完全に拭いてくださることを確認しておきましょう。

イエス・キリストを信じる者たちは、罪を赦され、新しい人生を与えられました。ですから、かつては、

自分の不幸を嘆いたり、悲しんでいたりしても、今は、もうそのようなことでは悲しみません。他の人から冷たい視線を向けられたり、軽く扱われたり、不利な目に遇わせられても、神をあがめることができます。なぜなら、信仰者は、神の子どもとされ、やがて天を相続することを知っているからです。

しかし、信仰者には、何の悲しみもなく、涙を流すこともないかという、そうではありません。信仰者もまた生身の人間として、この世では、痛み、悲しみを避けることはできません。天が約束されていても、愛する人との地上の別れは悲しいものです。クリスチャンは罪の刑罰から「すでに」救われています。罪の存在からも、「やがて」救われるでしょう。しかし、この世にある限り、クリスチャンは、「すでに」と「やがて」の間で生きていて、様々な闘いや悲しみを体験します。時には地上の歩みの最後まで悲しみの中を通ったとしか思えないようなこともあるかもしれません。しかし、やがて、すべてが平安に、すべてが喜びに包まれる時がやってきます。聖書はその時のことをこう描いています。「また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。『見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。』」黙示録 21:1-4

これは、わたしたちの救いの完成を描いたものですが、この救いは、いきなり完成するのではなく、はじまりがあり、成長があつて、完成に至るものです。ヨハネ 1:14に「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」とあります。イエス・キリストが人となられたことを言っている言葉ですが、「住まわれ」と訳されている言葉には「幕屋を張る」という意味の言葉が使われています。「神の幕屋が人と共にある」という完成の時は、イエス・キリストが人なって世に来られたときに始まったのです。「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」というヨハネ 1:12の言葉の通り、「人は神の子どもとなる」ということも、この二千年、数えきれないほどの人々がイエス・キリストを信じて、神の子ども、また、神の民とされることによって成長しているのです。イエス・キリストによってはじまった救いは、今、完成に向かっていきます。主イエスを信じたとき与えられた救いは、わたしたちのうちで成長し、完成に向かうのです。

わたしたちは、完成した救いにいきなり入るわけではありません。イエス・キリストがはじめてくださった救いを今、受け入れ、みずからのうちに救いの成長を見ることによって、救いの完成に至るのです。今は目に見えなくても、主イエス・キリストを受け入れる者が、やがての日に、主イエスに顔と顔とを合わせることができるのです。すでに召された兄弟姉妹と共に主を褒めたたえるようになるのです。今、たとえ涙を流すことがあっても、主イエスに信頼し、従っていく者が、やがての時に、その涙を拭いていただけるのです。このとき、「その人たちは慰められる」という約束は完全に成就します。たとえ、この世が悲しみ多いものであったとしても、その中で涙の日々を過ごすことがあっても、この主の約束に慰められ、日々を歩みたいと思います。